

特集 ①:ミュンヘン・ハイエンドショー

## High End 2015 in Munich 見学記

株式会社ディーアンドエムホールディングス CSBU Design Center

飯原 弘樹

ドイツミュンヘンで開催されたオーディオショー「High End 2015」の様子を紹介する。

High End は 1 日ですべてを見て回るのは不可能なほど多くのオーディオ製品やソリューションが一堂に会するオーディオ業界のための世界最大の見本市だ。今年の High End は 5 月 14 日から 17 日まで 4 日間開催されたが、筆者は幸運にもこの見本市に足を運ぶことが出来た。まだこの業界のエンジニアとして経験の浅い筆者にとって、今回のオーディオショーでは多くの感銘を受けた。



写真 1. 会場風景 2F

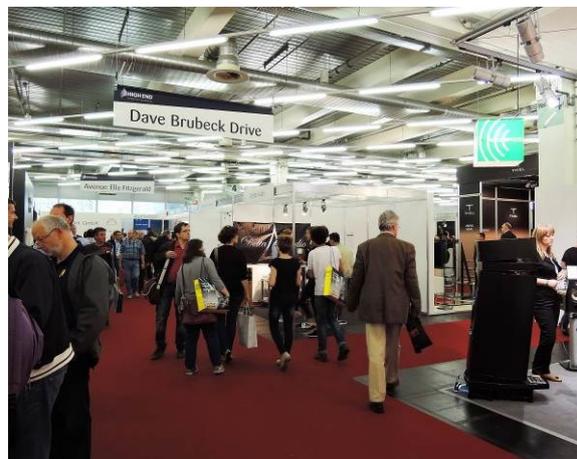


写真 2. 会場風景 1F

まずはその会場の活気に圧倒された。開場後瞬く間に廊下や打ち合わせスペースは来場者で埋め尽くされ、おのおのが目当てのブースへ一目散に向かっていく様子は印象的であった。各社のブースは熱気と活気に溢れ、人気の製品の試聴や展示には多くの人だかりができていた。この雰囲気は日本のオーディオショーでは珍しく、さながら CEATEC などに近い印象を受けた。

各社のブースに設けられた VIP ルームでは活発に商談が行われていたが、会場の各所でも Visitor はもちろん Exhibitor も、各社の製品カタログを片手にオーディオ談義に花を咲かせる様子が多く見られた。ここは展示会であると同時に、世界中の設計者や愛好家が情報を交換する側面も強く持っていることを改めて認識した。

また、日本のオーディオショーの体験しか無い筆者にとって、会場の規模と出展者数には驚かされた。法人向けの展示も多いため、日本のショーではなかなか見ることのないオーディオ用デバイスや測定器の展示も多くなされていた。コンシューマー向けでは、普及機から超ハイエンド製品まで幅広く展示されており、オーディオに関するものは何でもあるといった印象を受けた。

これら各社の展示から筆者が印象に残ったブースを紹介する。

日本では見る事のできない規模で展示を行っていた DEVIALET 社ブースでは、今年初めの International CES で発表した”Phantom”を大々的にアピールしていた。また、ネットワークや各種デジタル入力をもつプリメインアンプ “Le800” は 6ohm 800Wx2 の強力な定格出力を持ちながら THD+N は 0.00025%を謳う。同社の根幹技術となる Class A と Class D アンプのハイブリットや、DSP による各社スピーカー毎に用意された時間軸補正は非常に興味深かったが、最も興味を引かれたのは、他社のオーディオ基板とは明らかに異なる設計コンセプトの製品基板だ。DEVIALET 社製品の基板は大型の電解コンデンサやアキシャルリードの抵抗器など基盤面積を圧迫する典型的な音質部品をほとんど使用せず、半導体の周りはシンプルかつ非常にコンパクトなレイアウトだった。オーディオ製品においても、このような合理的な設計手法は、今後参考にしたいと感じた。



写真 3. DEVIALET Phantom 分解モデル



写真 4. DEVIALET Le シリーズ分解モデル



写真 5. mbl 101 X-Treme

mbl 社のブースでは呼吸球方式を具現化した奇抜な外観のラジアル型スピーカーの展示とデモを行っていた。”mbl 101 X-Treme”の極めて自然な出音に多くの来場者が聴き入っていたが、それが独特の振動版の動作メカニズムにより実現されていることは非常に興味深かった。

一方で、一般的なコーン型のユニットを搭載するスピーカーメーカー各社の展示は、エンクロージャー、コーン素材やバスレフポート形状に常に最新の研究成果が活かされ、地道ながら技術の進歩を感じられた。各社が様々な着目点から開発を行い、ある1つの方式に収束せず、様々な形状で製品化されたスピーカーを見ていると、オーディオの奥深さを感じることが出来た。

次に、High End におけるヘッドフォンやポータブル機器の展示を紹介する。

住環境の違いから、欧州では高音質を謳うポータブルプレーヤーに高級ヘッドフォンを組み合わせて音楽を楽しむ愛好家は、割合で言えば日本より少ないと聞いていた。しかし、筆者が会場で受けた印象から言えば、ヘッドフォンやポータブル機器のブースは、日本のポータブルに特化したイベントにも劣らない盛況ぶりであった。

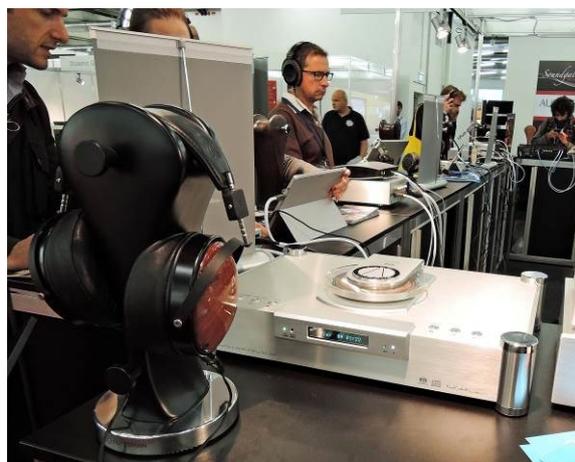


写真 6. AUDEZ'E 社の製品展示



写真 7. Astell&Kern のブース



写真 8. D&M のヘッドフォン展示ブース

老舗の SENNHEISER、beyerdynamic、近年興味深い製品を次々と出している AUDEZ'E や HIFIMAN といった海外のハイエンドヘッドフォンの展示に加え、日本のヘッドフォンメーカーの展示ブースでも多くの愛好家達が積極的に説明員に質問を投げかけていた。高音質のポータブルプレーヤーを数多く手がける Astell&Kern 社のブースでは招待客のためにプライベートの立食パーティーが開催され、力の入れようが伝わった。D&M のブースでも、ヘッドフォン、ヘッドフォンアンプの展示コーナーを設け、この分野の製品を大々的にアピールした。

会場で印象に残った光景は、ある欧州の愛好家が自前の高音質ポータブルプレーヤーとポータブルヘッドホンアンプを会場へ持ち込み、展示のヘッドフォンを試聴していたことだろう。ポータブル機器でこういったマニアックな聴き方をするのは日本人くらいだと勝手に思っていたが、欧州でも Hi-Fi として徐々にこういった音楽の楽しみ方が浸透し、この分野の製品の需要は増えているようである。

High End の展示において特徴的に感じたことは、真空管アンプやターンテーブルの展示の多さであろう。日本でも真空管アンプには自作を含め根強いファンがおり、LP に至っては近年徐々に流行の兆しを見せている。しかし High End では、いまだこれらの製品がオーディオの主流なのではないかと錯覚するほど多くの製品が展示され多くの来場者を集めていた。各社のターンテーブルは家具の一つとしてデザイン性に優れたものが多く、また、独特の形状とメカニズムで視覚的に楽しみを与えてくれる製品が多く存在した。普段設計をしながら今まで意識したことはなかったが、オーディオ機器がこういった側面から楽しさを与えてくれることは新鮮だった。会場では LP を直売するブースもあり、多くの愛好家で盛況だった。



写真 9. Pro-Ject 社の製品展示



写真 10. LP の直売ブース

作り手の熱意のこもった様々な製品展示を見ていくうちに、音楽を聴くという一つの目的のために、これだけ多くのメーカーとこれだけ多くの愛好家が存在し、皆がこの奥の深いオーディオをただ愛し、楽しんでいることに、それに参加している一人として喜びを感じた。オーディオ機器はただの電化製品であってはならず、ユーザーにエンターテインメントを提供する装置でなければならない。これは筆者が入社後まもなく上司から言われた言葉であるが、High End でそれを強く実感した。

今年の High End の様子を簡単に紹介したが、これら以外にもまだまだ見どころがあった。筆者としては、多くの展示を見るために見学内容が広く浅くなってしまった事が悔やまれる。次はただ見学するだけでは無く、設計者として知識と経験を積み、多くの他の設計者や愛好家と意見の交換をするためにまたこの場所に戻ってきたいと強く感じた。

執筆者プロフィール

飯原 弘樹 (いいはら ひろき)

2011 年 4 月 株式会社ディーアンドエムホールディングス 入社

Hi-Fi / Mini System 製品の電気回路設計に従事